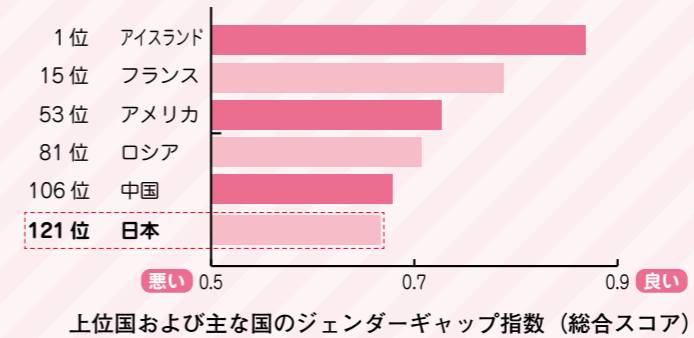


近年、国家の開発目標、まちづくりなどの指標となりつつあるSDGs。その5つ目の目標となっているのが「ジェンダー平等の実現」です。日本でも、この開発目標に向けてさまざまな施策に取り組んでいるところですが、世界情勢の改善に取り組む国際機関「世界経済フォーラム」が公表している、男女格差を測る指数「ジェンダーギャップ指数2019」によると、日本は121位。これを見る限り、諸外国と比べ遅れているのが現状です。この「ギャップ」を改善していくためには、まず身の回りのギャップを認識しなければいけません。多様な立場、年齢で感じているジェンダーギャップについて理解し、それぞれが取り組んでいること・心がけていることから、改善策を探ってみました。



市長インタビュー

●ジェンダーギャップ指数（日本の順位）について

教育と福祉は先進国だと思いますが、政治と経済のところでギャップがあります。学校にいる間は男女の差別無く、男性も女性も実力を発揮できると思って育ててきていますが、現実の社会に出るとなかなかそうはいかない、という現状があると思います。

●ジェンダーギャップを埋めるための改善策・改善案

世の中の仕組み（法律や制度）はとても早いスピードで変化しますが、人の心に根付いた価値観や社会的慣習は変わることには時間がかかると感じています。男性だから、女性だからではなく、個人が持っている個性や実力を発揮できる機会の提供や研修等も必要だと。実力が伴えば女性でも男性でも積極的に責任のあるポジションへあがっています。

●ジェンダー平等の視点で、島田市のビジョンはありますか？

今、一番眠っている資源は女性です。女性の活躍社会は制度だけではなかなか進まない。我々の男女間の意識のギャップが無くなり、女性も男性も同じように働き、評価をされる島田市でありたいと思っています。

パレット ジェンダーギャップアンケート

市議会議員、小中学校教員、事業所、高校生を対象に、ジェンダーギャップについてアンケート調査を行いました。

Q1 ジェンダーギャップ指数（日本の順位）についてどう思いますか

- 議 残念な結果です。今なお男女格差が大きすぎる。
- 教 男女格差がまだ残っており、男女平等が充分進んでいない現実を残念に思います。
- 高 思ったより順位が低く、びっくりした。

Q3 皆さんの生活の中で、感じているジェンダーギャップはありますか

- 議 管理職は男性が多いと感じる。成人を境に男女格差が生じていると感じる。
- 議 もっと女性議員を増やしたい（現在18人中4人）。さまざまな課題に女性の視点から提言できる施策は多い。
- 議 町内役員が全て男性でびっくりしました。
- 教 児童氏名印の色が男子は青、女子はピンク。仕事を効率的に進める上での工夫？ジェンダー？
- 教 児童も職員も、細かい作業（飾りつけ、家庭科など）が女性、力仕事や体力的活動は男性に任せられることが多い。
- 議 建設業ですが、現場管理者の中には女性がいない。募集はしているが、希望者がいないのが現実。
- 高 祖父母が「女の子だから、男の子だから」と差別をしている。

Q2 ジェンダーギャップを埋めるための改善策・改善案はありますか

- 議 経済、教育、健康、政治は、身近な生活の中に全て含まれていることを意識し、興味を持つことが大事ではないかと思う。
- 教 道徳、学活（人権教育として）で学ぶ機会をもつ。
- 教 “当たり前”を問い直すために（生徒も教員も）学習する機会をとる必要がある。
- 教 教職員のさらなる意識改革を図っていく。
- 高 男女がお互いについてもっとよく知ること。

Q4 現在、ジェンダーギャップを埋めるために取り組んでいることはありますか

- 議 我が家（60代夫婦）では「夫は外で働き、妻は家庭を守る」という考え方を退職後も引き継いでいる。最近ではやっと洗濯やゴミ出しを夫がやるようになった。性別役割分業は少しずつ変わってきているところである。
- 教 性差にとらわれず、個性に応じて役割を分担して任せる。
- 教 「人権教育」を日々大切にする、一人一人の個性や特性を理解することに努め、それを生かすことを心がけている。
- 議 ギャップと捉えるのではなく、人手不足の中、こちらがその人その人に合った仕事をしていただくという方向性。
- 高 特になし。ジェンダーに対してその人が抱いたようにいれればいいと考えている。

用語解説

- ジェンダーとは…社会的・文化的に形成された性別のこと。人間には生まれつきの生物学的性別がある一方、社会通念や慣習の中には、社会によって作り上げられた「男性像」「女性像」があり、このような男性、女性の別を「ジェンダー」といいます。
- SDGsとは…2001年に策定されたミレニアム開発目標（MDGs）の後継として、2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の誰一人として取り残さないことを誓っています。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組む普遍的なものであり、日本としても積極的に取り組んでいます。

改善されない日本のジェンダーギャップ指数は深刻な問題です。これに歯止めをかけるために改めて考え直すときが来ました。

アンケート結果からもわかるように、どの世代も少なからずジェンダーギャップを感じている現状や、教育現場では男女平等の教育が進んでいますが、成人から男女の格差が生まれている日本の現実に向き合うかが重要になってきます。男女の性別役割の固定観念を取り払い、個人が特性を生かし、誰もが尊重される社会にするために、私たちの意識改善から行動に移すことが大切です。

